

## 天理図書館蔵『団扇絵づくし』注釈

牧野さやか 矢田真依子 川崎淳子  
櫻井ちひろ ピエデパルンボ・マリア・テレサ

本稿は、天和四年（一六八四）に刊行された『団扇絵づくし』（天理図書館蔵）を、全文翻刻したものである。テキストには、天理図書館善本叢書・和書之部・第六十七巻『師宣政信絵本集』（八木書店、昭和五八年）所収の影印を用いる。

本稿は、岩坪健による大学院の授業で輪読して、院生が自分の担当箇所を翻刻して出典などを調べ、岩坪が加筆したものである。なおテキストには全丁にわたり絵があるが、それは割愛した。

### 【凡例】

一、底本を忠実に翻刻することを原則としたが、次のような校訂方針に拠る。

1 漢字は原則として、通行の字体に統一する。

天理図書館蔵『団扇絵づくし』注釈

2 漢字・仮名ともに、誤字、脱字、当て字、仮名遣い、清濁は底本の通りとする。

3 誤写かと思われる箇所は、右行間に（ママ）と記すか、または推定した文字を（カ）の中に入れた。

4 文字の判読が不可能な場合は、□と記す。

5 踊り字は、「、」「々」「く」を区別して用いる。

6 読解の便宜上、句読点と「」を付す。また振り漢字も付けて（ ）内に記し、本文の右側行間に示す。

7 行ごとに改行せず、追い込んで翻刻する。ただし和歌は行頭を下げて、一行書きにする。

8 底本の丁の切れ目を【○オ】【○ウ】のように示し、本文の末尾に置く。

二、翻刻の次に、本文の語釈を【語釈】の欄に記す。見出し語は原則として、底本の表記のまま掲げる。

三、【語釈】の次に【和歌の出典】または【出典】を置く。【和歌の出典】には、本文に引かれた和歌の出所を、北村季吟編『八代集抄』（山岸徳平編、有精堂、昭和三五年刊）で示し、詞書と詠者を記す。【出典】には、本文全体の典拠を末尾に置く。典に関しては、川崎淳子が担当した解説を末尾に置く。

団扇絵づくし序

あふきうち(扇 団 扇)はの地紙を押たる屏風あり。此団扇の内を見るに、長谷川、土佐、筆をつくしたる絵あり。興ありて誰人も褒美しければ、是にもとついで菱川の工夫にたより、絵書て出しぬ。見る人、「ひとり居のねやの伽よきにもならんかし。はん女(班 女)のむかし、あふき(扇 変)をてうあひし給ふこ、ちこそすれ」としかいふ。【初オ】

きみまつよひ(君 侍 乙)のつれ(徒 然 草)く草、そこはかとよみ給ひし秋の夜の、ながくも君をおもふまひそよ、など、うちうらみたる有さまは、

なにしおは、いさこと、はん都とり我おもふ人はありやなし(マ マ)や

と、よみし歌のこ、ろなるへし。

とふ人もあらしふきそふあきはきてこのはにうつむやとの道芝

【初ウ】

【和歌の出典】第一首『古今和歌集』巻第九、羈旅歌、四一一。「詞書略」在原業平朝臣。第二首『新古今和歌集』巻第五、秋歌下、五一五。「千五百番歌合」に 皇太后宮大夫俊成女」。

物(物 好 ぎ)好きなる人、いつれにつけて、かはりたる事をこのみ給ふ。扇にかづら花をこのみて、「わが思ふ人に歌よみてたまはれ」とて、つかはしぬ。きみまつよひ(君 侍 乙)のうた、ねをうらみて、かきおくりぬ。

うた、ねのあさけの袖にかはる也ならずあふきのあきのはつか  
せ【一オ】

【和歌の出典】『新古今和歌集』巻第四、秋歌上、三〇八。「百首歌に 式子内親王」。

てならひせしわ(若 衆)か衆、弥生す糸の五日に天神へ(論 で)まふでせし。□師匠とうちつれて、花を見物しつ、かたへ、ちくやうな(竹 葉 边)どうたひ、さけをのみしが、ししやうよろこぶけしきにて、さかなにうたひを(論 説)しよしければ、つ、みおつとりうたひけるこそ面白けれ。【一ウ】

さそはれぬ人のためとやのこりけむあすよりさきの花のしら雪  
【和歌の出典】『新古今和歌集』巻第二、春歌下、一三三六。「返し

摂政太政大臣。

みやつかへしける女をかたらひ侍りけるに、やんことなきおとこの、  
つりたちていふけしきを見て、うらみけるを、女あらかひければ、  
いと心もとなしとて、しのひてにわたすみし志をおもひやりて、  
ある人、歌よみける。

いつわりをたすのりのゆふたすきかけつ、ちかへ我をおも  
は、【二才】

【和歌の出典】『新古今和歌集』卷第十三、恋歌三、一二二〇。「宮  
づかへしける女をかたらひ侍りけるに、やむことなき男の人たちて  
いふけしきを見て、恨みけるを、女あらがひければ、よみ侍ける。  
平定文」。

とりなりじまんせし(百機)ふり袖、花見にゆくに、だてな(二)つまへ(前)、しは  
た、しくふりてあゆみしを、うつけたるぶうくこれをみて、「い  
つかたへの御いてぞ、御とも申さん」といへは、いと(能)はつるこ、ろ  
もなくて、うたにてあいさつしけり。

つくくとはるの詠のさひしきは忍ふにつたふ軒の玉水【二  
ウ】

【語釈】「とりなり」なりふり。身のこなしや身なり。「つまへ」

重ね着した衣類の前を、一つにまとめて合わせて着ること。「ぶう  
ぶう」無頼の徒。【和歌の出典】『新古今和歌集』卷第一、春歌上、  
六四。「閑中春雨といふことを 大僧正行慶」。

みやこと(當時カ東寺カ)うし(羅)のらしやうもん(門)に、しめて(酒)んど(童)うじ(子)といへる鬼、  
住けるとて、おほくの人なやみける。その頃、みなものよりみつ  
の家従に、わたな(渡)へ(迎)のつな(綱)といひし人は、かのいば(茨)ら(木)きを(退)たい(道)ち(光)せ  
んとて、らしやうもん(羅)に(生)さしか(門)かり、しるしのふたをたて、かへら  
んとし給ふに、にわか(雲)に黒雲さかりて、つな(童)が(子)かぶとをつかみける。  
つなは、ことともせずして、うちもの、さやは(童)づ(子)し、どうじが  
かい(能)なをきりをとしける。【三才】

【出典】『平家物語』劍卷。謡曲「羅生門」。

うちわにかける梅と竹とをみて、あるござかしきものいひける  
はむ(葉武者カ)さは、「にほひたりしといへとも、風にさそはるれとも、にほ  
ひなし」といひければ、あるおどけもの、こたへに、「さらは歌を  
よみてきかせん」とて、

こゝろあらはとはましものを梅か香にたか里よりもにほひきつ  
らむ【三ウ】

【語釈】「葉武者」取るに足らない武者。雑兵。こつばむしや。【和

歌の出典』『新古今和歌集』巻第一、春歌上、四三。「梅花遠薫といへる心をよみ侍ける 源俊頼朝臣」。第四句「たがさとよりか」。

大原のさとへみゆきありて、はるは花、あきは月などをなかめ、歌のくわいありし事を、扇に書うつしけるに、うたをのそみしかは、

ときは今はるに成ぬとみ雪ふるとをき山へにかすみたなひく  
あきとたにわすれんとおもふ月かけをさもあやにくにうつころ  
もかな【四オ】

【和歌の出典】第一首『新古今和歌集』巻一、春歌上、九。「題しらず 読人不知」。第二首『新古今和歌集』巻第五、秋歌下、四八〇。「千五百番歌合に 藤原定家朝臣」。

けんじのゑをかけるうちわあり。松風とも人□な□へし。枝、たをやか成、松をかきたりしか、そに、歌よみし。

ときはなる松にか、れるこけなれはとしのをながきしるへとそ  
思ふ【四ウ】

【和歌の出典】『新古今和歌集』巻第七、賀、七三二。「題しらず 読人不知」。

そがの五郎ときむねは、大ここのつわものにて、ちからは、よに

すかれて、大ばんじやくをも、なげたをす。ある時、あさいなの三郎と、ちからくらべせんとて、よろひの下たれを三枚かさねて引切とも、五郎は、たち所をちつともさらすぞ居たりける。さすか大このあさいなも、したをふるふて立ざりけり。【五オ】

【語釈】「あさいなの三郎」朝比奈義秀。鎌倉初期の武将。和田義盛の子。【出典】幸若舞「和田酒盛」。

みなもとのいたるは、世にすぐれたるびなんにて、色このみ成事、なりひらよりいやまさりしか、御所へ、しのびやかに、かよひて、きささのたちへ、よばひ行けり。

日くらしのなくたくれそうかりけるいつもつきせぬおもひなれ  
とも【五ウ】

【和歌の出典】『新古今和歌集』巻四、秋歌上、三六九。「題しらず 藤原長能」。

するかのくに、みほの松はらに、よりととも、ふじのまきがりし給ふ  
ときの馬をはなし給ふ。そのたねのこりて、今に馬あり。ゑをは  
む事、ふじゆなる所なれば、やせおとろへたるありさまをは、あふ  
きの絵にうつして歌をかきり。

それなからむかしにもあらぬするかなるみほかさきなるまきか

りのこま【六才】

【和歌の出典】『新古今和歌集』卷第四、秋歌上、三三八。「秋の歌とてよみ侍ける 式子内親王」。第三句以下「秋風にいとゝながめをしづのをだまき」。【出典】『曾我物語』。

なりひら、あづまへくたり給ふ時、みかわの国、八はしを、とをりすきて、するがのくに、うつの山べを、とをり給ふに、つたのほそみち、いと心ほそく、さみしければ、かくよめり。

するかなるうつ山へのうつ、にもゆめにも人にあはぬなりけり【六ウ】

【和歌の出典】『新古今和歌集』卷第十、羈旅歌、九〇四。「するがの国うつの山にあへる人につけて、京につかはしける 在原業平朝臣」。

あふき、おはな、きく、ふぢはかま、き、やうを、かきたり。「これに発句せよ」とありければ、秋の野草を歌よみけり。

ふぢはかまぬしはたれともしら露のこほれてにほふのへの秋風いとかくや袖はしほれし野へに出てむかしもあきの花はみしかと【七才】

【和歌の出典】第一首『新古今和歌集』卷第四、秋歌上、三三九。

「蘭をよめる 公猷法師」。第二首『新古今和歌集』卷第四、秋歌上、三四一。「入道前関白太政大臣、右大臣に侍ける時、百首歌よませ侍けるに 皇太后宮大夫俊成」。

うちわの絵に、かこにきくのはなをなげ入たるをかきたり。「このはなよせて、うたをかきつけよ」とありければ、

霜をまつまかきのきくの宵の間にさきまよふ色は山のはの月九重にうつろひぬともきくの花もとのまがきをおもひわするな

【七ウ】

【和歌の出典】第一首『新古今和歌集』卷第五・秋歌下・五〇七。「五十首歌奉りし時、菊籠月といへるこゝろを 宮内卿」。第二首『新古今和歌集』卷第五・秋歌下・五〇八。「鳥羽院御時、内裏より菊をめしけるに、奉るとて、むすびつけ侍ける 花園左大臣室」。

あるわかしゆ、あふきをおらせけるに、武者多ありければ、「これは誰なるらん」ととひければ、「さ、きの三郎もりつな、藤戸のせんちんの時、かわせをあひみる所なり」といふ。「けに、さもこそあらめ」といふ。わかしゆ、あふきによそへて、

うた、ねのあさけの袖にかはるなりならずあふきのあきのはつかせ【八才】

【和歌の出典】『新古今和歌集』巻第四・秋歌上・三〇八。「百首歌に 式子内親王」。【出典】『平家物語』第十巻「藤戸」。謡曲「藤戸」。

むかしは、くげ、もんせきも関東へくだりて、名所く一見し給ふ事あり。奥州の松嶋を一見して歌よみ給ふ。

鴨長明

松嶋やしほくむあまの秋の袖月はものおもふならひのみかは

七条院大納言

あきのよの月やをしまのあまのはら明かたちかきおきのつりふ

ね【八ウ】

【和歌の出典】第一首『新古今和歌集』巻第四、秋歌上、四〇一。

「八月十五夜和歌所の歌合に、海辺秋月といふ事を 鴨長明」。第二首『新古今和歌集』巻第四、秋歌上、四〇三。「和歌所歌合に、海辺月を 藤原家隆朝臣」。『新古今和歌集』四〇二番歌が七条院大納言の歌。

うつけたる男、正月(正月買)かいせんとて、よしはらへ行やくそくする。はや正月にもなれば、あけや町(扇屋町)やどふたにてゆき給ふに、きやく(巻)をそしとて、座敷にとちこもりて、しやみせん(三味線)を引て詠給ふ。

□□□の春にこ、ろをつくしきぬあはれとおもひくるきみも  
かな【九才】

【和歌の出典】『新古今和歌集』巻第二、春歌下、一〇〇。「千五百番歌合に、春歌 皇太后宮大夫俊成」。初句「いく年の」、下の句「あはれとおもへみよしの、花」。

楠(正)まさしけ、すてに一せん(戦)におよびし時、みなと川のた、かひに、手いたくかたきせめくれは、「さらは、さいごのいくさをせん。なをのこさん」とて、嫡男ヲちかつけ、おくれのかみをかきなで、家につたはるまき物をこそはゆつりける。まさしげほと(正)のゆみとりも、よろひの袖をしほりけり。そばにありあふさ(符)ふらひと、ともになみだをなかしける。【九ウ】

【出典】『太平記』巻第十六「楠正成兄弟兵庫下向の事」。

ほていといひし人は、てんぢく(天竺)のひと(人)なりしか、数のたから(宝)をもち給ふ。その中にも、子ほと(希)のたからはあらじとて、かずの子ともをふくろへ入、とり出してはてうあひし給ふ。さるによつて、子にましたるたからなしとて、七ふく神の第一とせり。

をのか庭に子ともやさそふ道もかな花ちりぬやととふ我みかな

【十才】

【和歌の出典】未詳。

けんそくわうていのきさきにやうきひとへるは、そのかたち、  
たとへていはんかたなき美人なり。くわうてい、てうあひかきりな  
し。さるに第一のきさきに、そなはり給ふ。池のほとりにみゆきあ  
りて、

池水の世々に久しくすみぬれはその玉も、光りみえけり【十  
ウ】

【和歌の出典】『新古今和歌集』巻第七、賀歌、七二三。「永承四年  
内裏歌合に、池水といふ心を 伊勢大輔」。

あふきのゑに、みをつくしかきたり。沖こぐふね、かすかにして、  
すさきにあみほしたるていの、いとおもしろければ、「これに何  
にても、にあわしき歌よめ」とありければ、

水鳥のかものうきねにうきなからなみのまくらにいくよへぬら  
ん【十一オ】

【和歌の出典】『新古今和歌集』巻第六、冬歌、六五三。「堀河院に  
百首歌たてまつりけるに 河内」。第二句「かものうきねの」。

やことなき上らう、琴をならひ給ふに、まつてならふはじめとて、

すがかきをけいこする。「あさましや、女のみなれは一夜ておちて、  
なをながすく。つんでとてん」と、引しやみせんにあわせ引給ふ。  
かふるも、こきうとりなをして、三人つれふしにてひかる、こそは  
おもしろけれ。【十一ウ】

むかしはみな白地のあふきにて、いくさのとき、さしはさむあふき  
にばかりしゆの丸を付たり。さまくゑようをするに、こふうめつ  
らしからすとて、ひいなかたもようを仕いたしける。

なつはつるあふきとあきのしら露といつれかさきにおかんとす  
らん【十二オ】

【和歌の出典】『新古今和歌集』巻第三、夏、二八三。「延喜御時月  
次の屏風に 壬生忠峯」。

ひさうむすめ、わるさしにゆくとて、ともたちをあつめて、つね  
はねをつき、手まりをつき日をおくる。いまた、おとなしき心も出  
きねは、はつかしとおもふ心もなし。人とうちましわりても、  
あいそうらしき事もなければ、あるおとけおとこ、よみける。

かすのこはうみのま、なるむすめかなことふきしげし恋のさか  
月【十二ウ】

【和歌の出典】未詳。

むかし、みなものよりまさ、<sup>(源)</sup>うち<sup>(頼)</sup>のさとにて、いくさし給ひしとき、<sup>(宇治橋)</sup>うちはしの板をはつし、行けたをへだて、た、かひ給ふ。<sup>(簡井淨明)</sup>つ、<sup>(一来法師)</sup>あいのぜうめう、<sup>(先傳)</sup>いらいほうしとなりて、せんちんする。そのより政、<sup>(頼政)</sup>うちまけ給ひ、平等院の庭にあふぎをしき、<sup>(自書)</sup>しかいし給ふとき、<sup>(辭世)</sup>じせいよみ給ふ。

むもれ木のはなさく事もなかりしにみのなるはてはあわれ也け

り【十三才】

【語釈】「筒井浄妙」近江国、園城寺の寺法師。治承四年（一一一八）源頼政と以仁王の拳兵に従い、宇治の戦いで弟子の一来法師と奮戦。【和歌の出典】『平家物語（覚一本）』源頼政の辞世歌、下の句「身のなるはてぞかなしかりける」。『平家物語（延慶本）』源頼政の辞世歌、下の句「みのなるはてぞ哀なりける」。

ふぢのはなは、そのふさ長く、たをやかなり。とりわけて、<sup>(吉野)</sup>よしの、さくら、<sup>(高懸)</sup>たかをもち、<sup>(野田)</sup>のだのふちとて、<sup>(三)</sup>これみつ名花にて、歌人もあまねく詠し給ふとなり。

まとひしてみれともあかぬ藤浪のた、まくおしきけふもあるか

な【十三ウ】

【和歌の出典】『新古今和歌集』卷第二、春歌下、一六四。「天曆四年三月十四日、藤壺にわたらせ給ふて、花をしませ給ける 天曆御

歌」。結句「けふにもあるかな」。

おさまれる御代のたうときよ、<sup>(尊)</sup>いくとせいける人、<sup>(文)</sup>ふんがくをこのみ、<sup>(昔簡)</sup>あけれ孔老のしよかんをのぞく。女もこれに<sup>(通力)</sup>しとて、うちましわり、<sup>(源氏)</sup>あさゆふ古今、万葉の歌をよみ、<sup>(源氏)</sup>けんじ、いせ物かたりのさうしをもてあそひて、<sup>(草紙)</sup>なくさみぬ。

かけて思ふ人もなければと夕されはおもかけたえぬたまかつらか

な【十四才】

【和歌の出典】『新古今和歌集』卷第十三、恋歌三、一一一九。「題しらず 貫之」。

<sup>(天)</sup>大こく神は、<sup>(天竺)</sup>てんちまかた<sup>(摩訶陀国)</sup>の福神なりしか、<sup>(祇)</sup>しやくぞん、<sup>(仏法)</sup>ぶつほうひろめ給ふとき、<sup>(米)</sup>かみをおろし御弟子となり給ふ。<sup>(五)</sup>五こく成就のために、<sup>(露ま)</sup>よねの俵をふまへ給ふ。世俗、福をいのらんとて、<sup>(殿)</sup>をのか住家、<sup>(殿)</sup>いぬいのすみにいはふ。ある人、<sup>(殿)</sup>さいたんのほつくにことふきて、

たしかみれは大こくのさうり也やみのほる【十四ウ】

【発句の出典】未詳。

<sup>(佐)</sup>さたうひやうへのりきよは、<sup>(鳥)</sup>とばのあんのほくめんのさふらひにて



ありしか、うたの上手にて、すでにほつしんしゆぎやうに出はやと  
思ひしか、今一たび君にまいり、御いとま申さんとて、御所をさし  
て出給ふ。ほつしんして後、西行法師とこそは申ける。

とめこかし梅さかりなる我やとをうときも人は折にこそよれ  
【十五才】

【和歌の典故】『新古今和歌集』巻第一、春歌上、五一。「題しらず  
西行法師」。

むさしのくにの住人くまがへの二郎なをさねは、八嶋うらにた、か  
ひに、ちやくし小次郎をみうしなひ、こゝろもとなくおもひつ、  
はまへをさしてたつね行給ふとなり。すてにうたれぬと聞しかは、  
ちからもなくてかへりける。

はかなくて過にしかたをかへりしは花にもの思ふ春そうらめし  
【十五才】

【和歌の典故】『新古今和歌集』巻第二、春歌下、一〇一。「百首歌  
に 式子内親王」。第三句「かぞふれば」、結句「はるぞへにける」。

しんたいかけに、すごろくをうつわか衆あり。しゆ三をかふてむさ  
んといふ。しよごんの女ぼう、「よくみ申さん」といへば、  
わかしゆあはて、ふりけるに、こいめこそは出にけり。さては、か

ちたり。かけをとらんといふ。じよごんのむすめ、りんきして、  
「いはふて三度といふ事あれは、うちなをし給へ」といふこそおか  
しけれ。【十六才】

【語釈】「しんたい」全財産。「しゆ三」双六で二つの賽の目に、と  
もに三が出ること。「こいめ」双六などで、出てほしいと思ってい  
る賽の目。「いはふて三度」幸運をつかんだとき、それを取り逃が  
さないように三度祈禱すること。

なつの夕涼みに、よしわらへ行てみれば、はりのつよきけいせは、  
ゆあみなどして、みをきよめ、しやうぎにこしうちかけ、行きの人  
にあふ。おできなどを見かけては、こでまねきしてよびよせ、たは  
このつけざしなどに□□□□□□□□□□のむしんをは、やりての  
か、にいわせける。【十六才】

【語釈】「おでき」遊女と客が、それぞれ相手をさしている語。

しらの扇に、山水をすみゑにてかきたり。谷あひにいほりあり。  
「これはいづくの名所をかきたり」ときは、「これは一たび、  
たくあんおしやう、いつの国へなかされたまふけいをかきたり」と  
いへは、此あふきに詩を書ぬ。

沢水為青々 無濁漁 廬有山中 貴一人

といふ詩也。おもしろし。【十七オ】

【詩の出典】未詳。【参考】史実では、沢庵が流されたのは出羽国（山形県）。

てんりやくの御時、ふちはらのたかみつをめして、かみな月といふ事をかみにかきおきて、歌つかうまつれとありけりければ、いそぎまいでよみける。

かみな月風にもみちのちるときはそこはかとなくものそかなし  
き【十七ウ】

【和歌の出典】『新古今和歌集』巻第六、冬、五五二。「天曆御時、かみなづきといふ事をかみにおきて、歌つかふまつりけるに 藤原高光」。

みなもとのよしつねは、父よしともきやうようのためにとて、五でうのはしに出て千人切をし給ひしに、その頃、むさしぼうべんけいといひしほうし、このよしをさくよりも、このこくわじやと出合てしやうぶをきわめて、君臣の礼義をせんとして、いそぎ五でうの橋に行、今やおそしと待居たり。よしつね、此よし御らんして、軍法の秘述を以て、はたしあひ給ふとなり。【十八オ】

【出典】御伽草子『橋弁慶』。

伊勢

みくまの浦より遠にくくふねの我をはよそにへたてつる哉  
我恋はありその海の風をいたみ頻によするなみのまもなし  
ゆめとても人にかたるなるといへは手枕ならぬまくらたにせず

【十八ウ】

【和歌の出典】第一首『新古今和歌集』巻第十一、恋歌一、一〇四八。「題しらず 伊勢」。初句「みくまの」。第二首『新古今和歌集』巻第十一、恋歌一、一〇六四。「題しらず 伊勢」。第三首『新古今和歌集』巻第十三、恋歌三、一一五九。「忍びたる人とふたりふして 伊勢」。

人麿

ほのくとかあかのうらのあさきりにしまかくれ行ふねをしそおもふ  
あしひきの山田もる庵にをくかひの下こかれつ、我こふらくは  
みかりするかりはのをの、なら柴のなれはまさらてこひそまされる

【十九オ】

【和歌の出典】第一首『古今和歌集』巻第九、羈旅歌、四〇九。「此歌はある人のいはく、かきのもとの人丸がなり」。第二首『新古今和歌集』巻第十一、恋、九九二。「題知らず 人麿」。第三首『新古今

今和歌集』卷第十一、恋歌一、一〇五〇。「題しらず 人麿」。

天和三年正月吉日

大伝馬三町目鱗形屋開板【二十ウ】

今どきはやりし、しやうへいそめといふあり。金のうちわに、なにかめつらしき絵をつけんと、たくみける五色のしなをわけて、絵つくしをぞか、れたり。

手もたゆくあふくうちわのおきところわするはかりにあき風ぞ

ふく【十九ウ】

【和歌の出典】『新古今和歌集』卷第四、秋歌上、三〇九。「題しらず 相模」。第二句「ならず扇の」。

にわたりのつがひとみなひ、ことりにゑをあてがいし所を、ゑにあらはしけるを見て、あふきにうたをのそみければ、

あかつきのとやにとりのねと、まらてうらむるかせのこゑその

これる【二十オ】

【和歌の出典】『新古今和歌集』卷第四、秋歌上、三二二。「題しらず 相模」。第二句「露もなみだも」。

右、此团扇絵本つくしは、世間に無類絵にして、殊工夫をはげまし給へは、此絵に首書して一冊にし令板行者也。

大和絵師菱川師宣筆

### 【解説】

天和四年（一六八四）刊行の『团扇絵づくし』（天理図書館蔵）中には、四十一首の和歌（うち、一首は発句のみ）<sup>①</sup>がみられる。その出典を列挙すると『古今和歌集』二首<sup>②</sup>、『新古今和歌集』三十五首<sup>③</sup>、『平家物語』一首<sup>④</sup>、出典未詳歌二首<sup>⑤</sup>であり、本作品の和歌は、『新古今和歌集』から最も多く採用されている。ただし、『新古今和歌集』から引かれた和歌三十五首のうち、五首<sup>⑥</sup>については『团扇絵づくし』の本文や絵に則して、『新古今和歌集』の歌の語の一部や句を改作したと思われる。

『团扇絵づくし』に転載された和歌が、『新古今和歌集』によると考える根拠として、まず、【八ウ】でみられる詠者の誤写が指摘できる。【八ウ】では『新古今和歌集』より、次の二首が選出されている。

① 鴨長明が名所松嶋を詠んだ四〇一番歌、「松嶋やしほくむあまの秋の袖月はものおもふならひのみかは」。

② 团扇絵に描かれた水面に浮かぶ釣舟と関わらせてたのであろうか、藤原家隆朝臣の四〇三番歌、「あきのよの月やをしまあ

まのはら明かたちかきおきのつりふね』。

しかしながら四〇三番歌には、藤原家隆朝臣の代わりに「七条院大納言」と『団扇絵づくし』には記されており、この人物は『新古今和歌集』では、家隆朝臣詠歌の一つ前に記されている四〇二番歌の詠者である。このような誤りが生じたのは、『新古今和歌集』から引用する際に、四〇一番の歌と詠者に続いて、四〇二番の詠者に四〇三番の歌を誤って付けて写したためと考えられる。

そのほか【二オ】のように、『団扇絵づくし』の本文と『新古今和歌集』の詞書がほぼ一致している例があることからも、この作品は『新古今和歌集』に大きく影響を受けていると言えよう。

注

① 【十四ウ】（十四丁裏の意味）に所載。以下の注も、掲載されている丁数と表裏を示す。

② 【初ウ】 第一首 【十九オ】 第一首

③ 【初ウ】 第二首 【一オ】 【一ウ】 【二オ】 【二ウ】 【三ウ】 【四オ】 第一首  
第二首 【四ウ】 【五ウ】 【六オ】 【六ウ】 【七オ】 第一首 第二首 【七ウ】  
第一首 第二首 【八オ】 【八ウ】 第一首 第二首 【九オ】 【十ウ】 【十一オ】  
【十二オ】 【十三ウ】 【十四オ】 【十五オ】 【十五ウ】 【十七ウ】 【十八ウ】  
第一首 第二首 第三首 【十九オ】 第二首 第三首 【十九ウ】 【二十オ】

④ 【十三オ】

- ⑤ 【十オ】 【十二ウ】
- ⑥ 【六オ】 【九オ】 【十五ウ】 【十九ウ】 【二十オ】
- ⑦ 【二オ】 【十七ウ】

〔付記〕 翻刻番号は、天理大学附属天理図書館本翻刻第一〇九九号である。